

## 【B年】聖霊降臨節第22主日(2023年10月22日)

## 【旧約聖書日課】士師記 7章1～8節、19～23節

1エルバアル、つまりギデオンと彼の率いるすべての民は朝早く起き、エン・ハロドのほとりに陣を敷いた。ミディアンの陣営はその北側、平野にあるモレの丘のふもとにあった。2主はギデオンに言われた。「あなたの率いる民は多すぎるので、ミディアン人をその手に渡すわけにはいかない。渡せば、イスラエルはわたしに向かって心がおごり、自分の手で救いを勝ち取ったであろう。3それゆえ今、民にこう呼びかけて聞かせよ。恐れおののいている者は皆帰り、ギレアドの山を去れ、と。」こうして民の中から二万二千人が帰り、一万人が残った。4主はギデオンに言われた。「民はまだ多すぎる。彼らを連れて水辺に下れ。そこで、あなたのために彼らをえり分けることにする。あなたと共に行くべきだとわたしが告げる者はあなたと共に行き、あなたと共に行くべきではないと告げる者は行かせてはならない。」5彼は民を連れて水辺に下った。主はギデオンに言われた。「犬のように舌で水をなめる者、すなわち膝をついてかがんで水を飲む者はすべて別にしなさい。」6水を手にすくってすすった者の数は三百人であった。他の民は皆膝をついてかがんで水を飲んだ。7主はギデオンに言われた。「手から水をすすった三百人をもって、わたしはあなたたちを救い、ミディアン人をあなたの手に渡そう。他の民はそれぞれ自分の所に帰しなさい。」8その民の糧食と角笛は三百人が受け取った。彼はすべてのイスラエル人をそれぞれ自分の天幕に帰させたが、その三百人だけは引き留めておいた。ミディアン人の陣営は下に広がる平野にあった。

19ギデオンと彼の率いる百人が、深夜の更の初めに敵陣の端に着いたとき、ちょうど歩哨が位置についたところであった。彼らは角笛を吹き、持っていた水がめを砕いた。20三つの小隊はそろって角笛を吹き、水がめを割って、松明を左手にかざし、右手で角笛を吹き続け、「主のために、ギデオンのために剣を」と叫んだ。21各自持ち場を守り、敵陣を包囲したので、敵の陣営は至るところで総立ちになり、叫び声をあげて、敗走した。22三百人が角笛を吹くと、主は、敵の陣営の至るところで、同士討ちを起こされ、その軍勢はツエレラのベト・シタまで、またタバトの近くのアベル・メホラの境まで逃走した。23イスラエル人はナフタリ、アシェル、全マナセから集まり、ミディアン人を追撃した。

## 【使徒書日課】

## ヘブライ人への手紙 11章32節～12章2節

11 32これ以上、何を話そう。もしギデオン、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエル、また預言者たちのことを語るなら、時間が足りないでしょう。33信仰によって、この人たちは国々を征服し、正義を行い、約束されたものを手に入れ、獅子の口をふさぎ、34燃え盛る火を消し、剣の刃を逃れ、弱かったのに強い者とされ、戦いの勇者となり、敵軍を敗走させました。35女たちは、死んだ身内を生き返らせてもらいました。他の人たちは、更にまさったよみがえりに達するために、釈放を拒み、拷問にかけられました。36また、他の人たちはあざけら

れ、鞭打たれ、鎖につながれ、投獄されるという目に遭いました。37彼らは石で打ち殺され、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊の皮や山羊の皮を着て放浪し、暮らして事欠き、苦しめられ、虐待され、38荒れ野、山、岩穴、地の割れ目をさまよい歩きました。世は彼らにふさわしくなかったのです。39ところで、この人たちはすべて、その信仰のゆえに神に認められながらも、約束されたものを手に入れませんでした。40神は、わたしたちのために、更にまさったものを計画してくださったので、わたしたちを除いては、彼らは完全な状態に達しなかったのです。

12 1こういうわけで、わたしたちもまた、このようにおびたしい証人の群れに囲まれている以上、すべての重荷や絡みつく罪をかなぐり捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、2信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもいとわないう十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。

## 【福音書日課】ルカによる福音書19章11～27節

11人々がこれらのことに聞き入っているとき、イエスは更に一つのたとえを話された。エルサレムに近づいておられ、それに、人々が神の国はすぐにも現れるものと思っていたからである。12イエスは言われた。「ある立派な家柄の人が、王の位を受けて帰るために、遠い国へ旅立つことになった。13そこで彼は、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『わたしが帰って来るまで、これで商売をしなさい』と言った。14しかし、国民は彼を憎んでいたので、後から使者を送り、『我々はこの人を王にいただきたくない』と言わせた。15さて、彼は王の位を受けて帰って来ると、金を渡しておいた僕を呼んで来させ、どれだけ利益を上げたかを知らうとした。16最初の者が進み出て、『御主人様、あなたの一ムナで十ムナもうけました』と言った。17主人は言った。『良い僕だ。よくやった。お前はごく小さな事に忠実だったから、十の町の支配権を授けよう。』18二番目の者が来て、『御主人様、あなたの一ムナで五ムナ稼ぎました』と言った。19主人は、『お前は五つの町を治めよ』と言った。20また、ほかの者が来て言った。『御主人様、これがあなたの一ムナです。布に包んでしまっておきました。21あなたは預けないものも取り立て、蒔かないものも刈り取られる厳しい方なので、恐ろしかったのです。』22主人は言った。『悪い僕だ。その言葉のゆえにお前を裁こう。わたしが預けなかったものも取り立て、蒔かなかったものも刈り取る厳しい人間だと知っていたのか。23ではなぜ、わたしの金を銀行に預けなかったのか。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きでそれを受け取れたのに。』24そして、そばに立っていた人々に言った。『その一ムナをこの男から取り上げて、十ムナ持っている者に与えよ。』25僕たちが、『御主人様、あの人は既に十ムナ持っています』と言うと、26主人は言った。『言っておくが、だれでも持っている人は、更に与えられるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられる。27ところで、わたしが王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、わたしの目の前で打ち殺せ。』

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 士師記7章1～8節、19～23節

1エルバアル、すなわちギデオンと、彼の率いる全軍は朝早く起きて、エン・ハロドのそばに陣を敷いた。一方、ミデヤン人の陣営はその北側、モレの丘に沿った谷にあった。2主はギデオンに言われた。「あなたと共にいる兵の数は多すぎるから、私はミデヤン人を彼らの手に渡さない。イスラエルが『自分の手で自分を救ったのだ』と言って、私に対して傲り高ぶるようになってはいけない。3そこで今、兵士たちに呼びかけて言いなさい。『恐れおののく者は皆帰るがよい。ギルアドの山から立ち去るがよい。』」すると、兵の中から二万二千人が帰って行き、一万人が残った。4主はギデオンに言われた。「兵の数はまだ多い。彼らを水辺へと下らせなさい。私はそこで、あなたのために彼らをえり分けることにしよう。私があるに『この者を共に行かせよ』と告げた者は、あなたと共に行く。私があるに『この者は共に行かせてはならない』と告げた者は、誰も行ってはならない。」5ギデオンは民を水辺へと下らせた。主はギデオンに言われた。「犬のように舌で水をなめる者と、膝をついてかがんで水を飲む者とを、すべて別にしなさい。」6手を口に当てて水をなめた者の数は三百人であった。残りの兵は皆、膝をついてかがんで水を飲んだ。7主はギデオンに言われた。「手で水をなめたこの三百人をもって、私はあなたがたを救い、ミデヤン人をあなたの手へ渡そう。残りの兵は皆、それぞれ自分の家に帰しなさい。」8ギデオンはイスラエルの兵士全員の手から食料と角笛を受け取った。そして、三百人をとどめ置き、残りはそれぞれの天幕に帰らせた。ミデヤン人の陣営は下に広がる谷にあった。

19真夜中の見張りが始まる頃、ギデオンと彼の率いる百人が敵陣の端までやって来ると、ちょうど見張りが交代したところであった。彼らは角笛を吹き鳴らし、手にしていた水がめを打ち砕いた。20三つの隊は角笛を吹き鳴らし、水がめを砕き、左手に松明を、右手には吹き鳴らす角笛を握りしめ、「主のため、ギデオンのための剣」と叫び、21各自持ち場を守り、敵陣を包囲したので、敵陣の者は皆走り出し、叫び声を上げて逃げ場を求めた。22三百人が角笛を吹き鳴らすと、主は敵陣の至るところで同士討ちとなるように仕向けられた。敵軍はソエララのベト・シタまで、またタバトの近くのアベル・メホラの境まで逃走した。23ナフタリ、アシェル、マナセ全土からイスラエルの兵士が招集され、ミデヤン人を追撃した。

## へブライ人への手紙11章32節～12章2節

11<sup>32</sup>これ以上、何を話しましょう。ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエル、また預言者たちについて語るなら、時間が足りないでしょう。<sup>33</sup>彼らは、信仰によって、国々を征服し、正義を行い、約束のものを手に入れ、獅子の口を塞ぎ、<sup>34</sup>火の勢いを消し、剣の刃を逃れ、弱い者が強くされ、戦いの勇者となり、敵軍を敗走させました。<sup>35</sup>女たちは、死んだ身内を生き返らせてもらいました。他の人たちは、さらにまさった復活を得るために、釈放を拒み、拷問にかけられました。<sup>36</sup>

また、他の人たちは、嘲られ、鞭打たれ、鎖につながれ、投獄されるという目に遭いました。<sup>37</sup>彼らは石で打たれ、のこぎりで引かれ、剣で殺され、羊の皮や山羊の皮を着て放浪し、欠乏し、苦しめられ、虐げられ、<sup>38</sup>荒れ野、山、洞穴、地の割れ目をさまよいました。世は、彼らにふさわしくなかったのです。

<sup>39</sup>この人たちは皆、信仰によって神に認められながらも、約束のものを手に入れませんでした。<sup>40</sup>神は、私たちのために、さらにまさったものをあらかじめ用意しておられたので、私たちを抜きにして、彼らが完全な者とされることはなかったのです。

12<sup>1</sup>こういうわけで、私たちもまた、このように多くの証人に雲のように囲まれているのですから、すべての重荷や絡みつく罪を捨てて、自分に定められている競走を忍耐強く走り抜こうではありませんか、<sup>2</sup>信仰の導き手であり、完成者であるイエスを見つめながら、走りましょう。この方は、ご自分の前にある喜びのゆえに、恥をもうとわなないで、十字架を忍び、神の王座の右にお座りになったのです。

## ルカによる福音書19章11～27節

11人々がこれらのことに聞き入っていると、イエスは続けて一つのたとえを話された。ご自身がエルサレムに近づいて来られたのに、人々は神の国がすぐにも現れるものと思っていたからである。<sup>12</sup>それで、イエスは言われた。「ある身分の高い人が、王の位を受けて帰るために、遠い国へと旅立つことになった。<sup>13</sup>そこで、十人の僕を呼んで十ムナの金を渡し、『私が帰って来るまで、これで商売をしなさい』と言った。<sup>14</sup>しかし、その国の市民は彼を憎んでいたので、後から使者を送り、『我々はこの人を王に戴きたくない』と言わせた。<sup>15</sup>さて、彼が王の位を受けて帰って来ると、金を渡しておいた僕を呼んで来させ、どれだけ利益を上げたかを知ろうとした。<sup>16</sup>最初の者が進み出て、『ご主人様、あなたの一ムナで十ムナもうけました』と言った。<sup>17</sup>主人は言った。『よくやった。良い僕だ。お前はよく小さな事に忠実だったから、十の町を支配させよう。』<sup>18</sup>二番目の者が来て、『ご主人様、あなたの一ムナで五ムナ稼ぎました』と言った。<sup>19</sup>主人は、『お前は五つの町を治めよ』と言った。<sup>20</sup>また、ほかの者が来て言った。『ご主人様、これがあなたの一ムナです。布に包んでしまっておきました。<sup>21</sup>あなたは預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものも刈り取られる厳しい方なので、恐ろしかったのです。』<sup>22</sup>主人は言った。『悪い僕だ。その言葉のゆえにお前を裁こう。私が預けなかったものを取り立て、蒔かなかったものも刈り取る厳しい人間だと知っていたのか。』<sup>23</sup>ではなぜ、私の金を銀行に預けなかったのか。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きでそれを受け取れたのに。』<sup>24</sup>そして、そばに立っていた人々に言った。『その一ムナをこの男から取り上げて、十ムナ持っている者に与えよ。』<sup>25</sup>僕たちが、『ご主人様、あの人はすでに十ムナ持っています』と言うと、<sup>26</sup>主人は言った。『言うておくが、誰でも持っている人は、さらに与えられるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられる。』<sup>27</sup>ところで、私が王になるのを望まなかったあの敵どもを、ここに引き出して、私の目の前で打ち殺せ。』

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・10月22日「聖霊降臨節第22主日」の日課主題は「天国に市民権をもつ者」。

・旧約聖書日課は、「士師記」から、士師ギデオンの物語のうち戦闘場面の一箇所。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、旧約の信仰者の名を挙げて「信仰」の系譜をイエスに結びつけて教える箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、「ムナのたとえ」の箇所。

**旧約日課(士師記7章より)**

・「士師記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「前の預言者」の第二の巻で、「ヨシュア記」で物語られたイスラエルのカナン定住後、王国時代までの間の時代を描く歴史物語文書。各部族が各々に生きる中で危機に際して立てられた指導者(士師)12人の物語を中心に展開されている。時代背景として設定されているのは、出エジプト～カナン定住の時期とされる前13世紀後半から、ベニヤミン族のサウルがイスラエル部族連合の王として立てられる前の前11世紀中葉までの時期で、150年ほどの短い時代である。この時代のオリエント世界は、「前1200年のカタストロフィ」と呼ばれる時代のただ中で、アナトリア半島に500年続いたヒッタイト王国が滅亡する一方、メソポタミア地域からはミタンニ王国、続いてアッシリア王国が西進して統一エジプト王国と対峙、さらに地中海を超えて到来する「海の民」と称される諸民族が新たに沿岸各地に出来し、それまでシリア地方まで支配下に置いていたエジプトの覇権は後退、大国に挟まれ覇権の間隙となったレバント地方(シリア～パレスチナ地域)では、諸都市国家が自力を高め相争うようになっていた。前11世紀中葉までに「イスラエル」の呼び名でベニヤミン族サウルのもとに結集するようになる諸部族は、この時期(戦国時代!)の合従連衡を通して部族連合を形成していくようになったと考えられる。その際に、「イスラエル」という共通のアイデンティティを拠り所とするようになったのは、おそらく元来から「ヤコブ＝イスラエル伝承」を継承していたであろう「エフライム族」および「ベニヤミン族」などであったと推認される。「創世記」やユダヤ口承における「族長ヤコブ伝承」は、もっぱらこれらの部族領域の地に結びつけられている。「士師記」は、そのような「イスラエル」部族連合が形成される過程を伝えるものであり、登場する12人の士師の出自は、少なくとも8部族にわたり、各部族ごとに伝えられてきた英雄伝説が「士師」の呼称のもとに結びつけられて編纂されたものとなっている。日課箇所に描かれる士師「ギデオン」は、「マナセ族」出身とされている。「マナセ族」は、「エフライム族」と共に「ヨセフ」を祖とする兄弟部族とされているが、「士師記」は、「ギデオン」の行動によって両部族間に軋轢が生じたことを伝えている(士師8:1以下)。

・「ギデオン物語」の前半は、彼が士師として率いた「イスラエル」が「ミディアン人」との戦争に勝利し、征服を遂げていくこと(士師8:28)に費やされている。「ミディアン人」は、「出エジプト記」から始まる「モーセ物語」の中で、指導者としてのモーセの出自に深く関わる部族として描かれ(出2～3章、18章など)、他方で、「イスラエル」にとって好ましくない対抗部族としても描かれていた。詳細は不明であるが、ミディアン人征服の物語は、「レビ人」として突如登場するモーセの出自を覆い隠す意図があるのかもしれない。

・「ギデオン」の名はヘブライ語で「破壊者」を意味する名であり、軍事指導者として名を成したことを伝えるものであるが、物語の途中で彼は、父親から「エルバアル(イェルバアル)」の呼び名を与えられている(士師6:32)。それは、父親の管理する「バアルの祭壇」をギデオンが破壊したことを町の人々が怒り、ギデオンを殺すように要求したことに對して、父親がギデオンをかばって「バアルは自ら争う」という意味で名付けたものであったとされるが(士師6:25～32)。「エル(イェル)ー」の語源の意味は明確ではない。「バアル」は、「主人」の意で広く用いられる語であるが、正典「前の預言者」の物語ではカナン人に固有の「バアル神」を指して用いられている例が少なくない。ただし、その場合も特定の「バアル神」があるわけではなく、「バアル・○○」のような形で地名などと結びついて多様な「バアル神」が想定されている。いずれにしても、「士師記」の描く命名譚は、「ギデオン」が軍事指導者として「エルバアル」の名をも有していたことを伝えるものであるが、このような神の名を含む王名は、古代オリエント世界で極めて一般的であり、この伝承の背景には、「ギデオン」が諸部族を従える「王」として立とうとしたような出来事があったのかもしれない。「士師記」自体は、「ギデオン物語」の後半で、彼の息子たちが「王」となる野心を持ったことに對して、それが挫かれていくさまを描き、「ギデオン」の野心を否定している。

**使徒書日課(ヘブライ11書)**

・「ヘブライ人への手紙」は、新約正典中、「使徒パウロ書簡集」と「共同書簡集」の間に置かれた書簡文書。末尾の形式から書簡文書としての体裁が取られている(あるいは元来書簡そのものであった)ことは確実であるが、冒頭にあるべき書簡としての定式がすべて失われている。新約正典中の書簡文書には、「ヤコブの手紙」などのように特定の宛先人名を明示せずに一般的宛名で作成された擬似書簡文書も存在するので、本書簡がそのような体裁さえ省いている(あるいは削除されている)意図は明確ではない。

・日課箇所は、11章冒頭から始まる「信仰論」の結論部分。旧約のアダムから始まる人物を「信仰による希望」に生きた人々と位置づけ、その系譜の末に「信仰の創始者、また完成者」としての「イエス」を描き出している。

・日課箇所(の冒頭(32 節)に挙げられている人名のうち、最初の 4 人は「士師記」に描かれる「士師」、残りの 2 人は「列王記」に描かれる「王」と「預言者」である。4 人の「士師」の名(ギデオン、バラク、サムソン、エフた)は、「士師記」の物語の順序とは異なる順で挙げられている。また、「列王記」から挙げる 2 人の名(ダビデ、サムエル)も、「列王記」の物語に登場する順序とは逆転している。特別な意図はないとも考えられるが、順に二人ずつの組で逆転させていることから、時代的に最後に登場させる「イエス」がすべて他の信仰者らに対して優位な存在であることを語ろうとする著者の文学技巧が込められていると言えるかもしれない。

・12:2「創始者」(アルケーゴス)と「完成者」(テレイオーテス)は、それぞれ「先導する者」と「終わらせる者」が原義。

### 福音書日課(ルカ 19 章より)

・日課箇所は、「ムナのたとえ」で知られる。非常によく似た「タラントンのたとえ」を「マタイ福音書」25 章も伝えているが、詳細の設定に違いがあり、それぞれの福音書に異なる意図があると考えられる。「ルカ福音書」は、このたとえの語られる場面を、主イエスがエルサレムに入られる直前の出来事として配置している。「マタイ」および「マルコ」は、主イエス一行がエルサレム近郊に入られる直前の場面として、「エリコにおける盲人の癒しの逸話」を置いているが、「ルカ」は、その逸話の後に「ザアカイの逸話」と「ムナのたとえ」を挿入し、「エルサレム入り」の最後の準備としている。「ムナのたとえ」は、「ザアカイの逸話」(1~10 節)と同じ場面設定の中で語られた教えである。

・「ルカ」が伝える「ムナのたとえ」と「マタイ」が伝える「タラントンのたとえ」の顕著な相違は、旅に出た主人が僕に託した金銭の設定に見られる。「ムナのたとえ」では「10 人の僕」に「10 ムナずつ」が託されるが、「タラントンのたとえ」では 3 人の僕にそれぞれ「5 タラントン」「2 タラントン」「1 タラントン」が託されている。「マタイ」の視点は「神から各人それぞれに異なる加重で託された使命にいかに応えるか」ということにあるが、「ルカ」の視点は「神から各人に対して公平に託されている恵みをいかに用いるか」ということにある、と解することができる。ところで、「タラントン」は「労働者 6000 日分の日当に相当」する高額単位であるが、「ムナ」は「労働者 100 日分の日当に相当」する単位とされる。つまり、「マタイ」は「生涯収入」を、「ルカ」は「年収」をイメージさせている。「マタイ」は信仰者が受けとめるべき「生涯の使命」を見据えているのに対して、「ルカ」は信仰者が「恵み」を与えられている今まさにそれをどう用いるべきかを問いかけているのだろう。

来週の誕生日 (10 月 22 日~28 日)

### 主日礼拝の讃美歌から

- ・21-579 番「主を仰ぎ見れば」は、1931 年版『讃美歌』編纂に先立って行われた讃美歌公募に際して、旧日本基督教会牧師・宮川勇が応募した作品の一つで、大分・佐伯教会を牧していたときに黙示録 21~22 章に着想を得てまとめた詩が原案とされる。曲も、同じ公募に応募した中学校音楽教師・土屋初枝の作曲した作品。
- ・21-385 番「花彩る春を」は、『讃美歌 21』編纂に当たって公募採用された日本人作詞作曲の讃美歌。作詞の上島美枝は、松山教会のオルガニストで、当初父親が作曲した曲との組み合わせで応募した。曲は、教会音楽家で合唱指導者・作曲家の高浪晋一が、この歌詞に合わせて作曲。
- ・21-382 番「力に満ちたる」(= I 82「ひろしともひろし」詞)は、19 世紀英国の代表的な讃美歌作家でスコットランド教会自由教会派牧師ボナーの作詞。曲は、V.C.テイラーの作曲。テイラーは、幼少期から音楽の才能を示し、歌唱学校を卒業後、教師として、また教会オルガニストとして活動している。
- ・21-107 番「主イエスのみ名は」は、中世東方教会のギリシア語聖歌で、9 世紀の聖テオクティストゥスの作詞とされている。19 世紀英国の古典讃美歌学者 J.M.ニールが英訳し、英語讃美歌に採用されるようになった。曲は、20 世紀米国ルーテル教会の音楽家 R.A.ストロームの作曲。

### 21-382「力に満ちたる」= I 82

#### O Love of God, how strong and true

1. O love of God, how strong and true, / Eternal and yet ever new;  
/ Uncomprehended and unbought, / Beyond all knowledge and all thought.
2. O wide embracing, wondrous Love, / We read you in the sky above;  
/ We read you in the earth below, / In seas that swell, and streams that flow.
3. We read you best in him who came / To bear for us the cross of shame,  
/ Sent by the Father from on high, / Our life to live, our death to die.
4. We read your pow'r to bless and save / E'en in the darkness of the grave;  
/ Still more in resurrection light / We read the fullness of your might.
5. O love of God, our shield and stay / Thro' all the perils of our way!  
/ Eternal love, in thee we rest, / For ever safe, forever blest.

### 21-107「主イエスのみ名は」

Ἰησοῦ γλυκυτάτε

#### (英語版) O Love of God, how strong and true

- 1 Jesus, name all names above, / Jesus, best and dearest, / Jesus,  
Fount of perfect love, / holiest, tend'rest, nearest: / Jesus, source  
of grace completest, / Jesus, purest, Jesus, sweetest, / Jesus,  
well of pow'r divine, / make me, keep me, seal me thine!
- 2 Thou didst call the prodigal; / thou didst pardon Mary, / thou whose  
words can never fall, / love can never vary, / Lord, to heal my lost  
condition / give (for thou canst give) contrition; / thou canst  
pardon all my ill / if thou wilt; O say, "I will!"
- 3 Jesus, open me the gate / that the robber enter'd, / who in that  
most lost estate / wholly on thee ventured. / Thou whose wounds  
are ever pleading, / and thy Passion interceding, / from my sins,  
O let me rise / to a home in paradise!